

# 儒教批判に始まり書籍購入で終わる空虚なる応酬

——『吳虞日記』と吳虞・青木正児の往来書簡から見られる交流——

辜 承 堯

## はじめに

吳虞（一八七二～一九四九）といえば、「四川省の隻手にて孔家店を打った老英雄」<sup>1)</sup>と胡適に讃えられていた。五四新文化運動期に巻き起こった儒教批判のオピニオンリーダーとして、陳独秀と双璧をなす人物である。最初に奥地の四川で孔子批判の名乗りを上げた彼は、その思い切った言動のために幾度か弾圧を蒙ったが、それに屈することはなかった。後には陳独秀との文通をきっかけに、雑誌『新青年』をはじめとする全国紙で名を知られるようになったのである。

従来、吳虞をめぐる研究は主にその儒教批判論の立脚点やその諸子学説への解釈に集中している。<sup>2)</sup>本稿は『吳虞日記』（以下『日記』と略す）と、彼と青木正児（一八八七～一九六四）との往復書簡を基礎資料として、二人が如何なる議論や心得を交わしていたのか、青木が如何に吳虞を日本学界へ紹介したのか、吳虞が青木と雑誌『支那学』を通じて日本学界に如何なる影響を与えていたのか、といった事柄の解明を研究目的とするものである。

## 一、儒教批判：文通を持続させる共同の思想基盤

両氏の書簡には儒教批判に関する議論が多くなかったものの、これは二人の文通を持続させる共通の思想基盤であったため、極めて重要な繋ぎ止めとなっていた。吳虞宛の一通目（一九二一年十月十九日）で、青木は「かつて『新青年』にて何度も先生の儒教批判の言論を拝読しましたので、ご高德はかねてより慕っております」と、敬慕の情を吐露し、「先生のご論考からひそやかに推察いたしますところ、先生は老荘思想を愛してやまない方だと考えられます。小生も似たり寄ったりです」（『日記』上冊、六五五頁）と、儒教とは対極をなす老荘思想の愛好者との共通点を見つけている。これへの返信で吳虞は、儒教批判により地元の政府から迫害を受けていたという自身の経験を詳述している。その意図は恐らく、青木の言った中国の思想革命を構成する「旧い思想の破壊」と「欧州の新しい思想の導入」という二つの方面のうちの前者に対して、自我的実践を表明することにある。

さらに、呉虞宛の九通目（一九二二年一月二十七日）で、青木は東京の漢学者が示している儒教固守の姿勢を批判したうえで、支那学を標榜している京都の学風を、「我々は堯舜を歴史上の实在人物と見做さずに、かえって儒家の徒が作為的に作り出した「亡是公」<sup>3)</sup>のような伝説だと思っております。我々は堯舜ですら信じませんから、ましてや孔子を拝むなんかはずもありません。（中略）我々の同志は孔子への迷信を決して心に抱いてはおりません。我々は皆學術の真理を愛しております」（『日記』下冊、一四頁）とまとめている。この立場を踏まえて、青木は「儒家以外の諸子著作における堯舜の伝説」と「文芸に対しての儒禍」<sup>4)</sup>という二本の論文を執筆する意向を表明している。これに対して、呉虞は同年二月九日に以下のように返信している。

「堯舜が儒家によって理想化された人物であることについて論ずる」の一文は感服しました。韓非子曰く、孔子も墨子も生まれ変わるべからざれば、誰かをして堯舜の真偽を定めんや<sup>5)</sup>。孔子も墨子も共に説いた堯舜の聖徳は、いずれも偽りの堯舜であり、真なる堯舜ではありません。廖季平も、堯舜が孔子に造りあげられた架空の人物であると申しております。もしこの大作が完成されたら、ぜひご発表ください。それは重要な論説ですから。（『呉虞集』、四〇一頁）

『日記』と両氏の四十五通にも及ぶ書簡を読む限り、このやり取りが儒学批判をめぐる唯一の記録であったが、純粋な学術探究として貴重なものと思われる。

## 二、空虚に流れる応酬：呉虞からの数多の書籍購入依頼

両氏のやり取りの中で、呉虞からの先秦諸子に関する研究書の購入依頼が多く見られる。青木宛の一通目で、呉虞は久保愛の『荀子増注』の代購を申し出ていた。呉虞は法政大学で当時最新の法律学や政治学を習い、自らも「兼ねて新学を求めると」自称していたにもかかわらず、その本領はといえば幼少期から受けた伝統的教育にあった。彼が北京大学国文系の教授として招聘された理由もここにあると思われる。青木に購入してもらった書籍のほとんどは先秦諸子に関する著書であった。因みに、世界の知識をどん欲に吸収したいという一端を物語る際に呉虞は裨益する著者として、ジェンクス、モンテスキュー、ミル、スペンサー、遠藤隆吉、久保天随などを陳独秀宛の書簡で挙げている。これを知った青木は平田篤胤の『西籍概論』を一部呉虞に進呈している。

呉虞が青木に購入を依頼した書籍を概観したところ、呉虞はとりわけ久保天随の著書に愛着しているようであった。一九一一年十二月十四日の青木宛の書簡に、「明治四十三年に東京博文館により久保天随の『荀子新釈』を三巻出版しております。先生にそれを一部送っていただければ幸いです。どうかどうかよろしくお願ひします。私はこれまでも久保氏の著書を愛読しております。ほかにも彼は『老子新釈』『莊子新釈』『列子新釈』『韓非子新釈』も出してありますが、この著書はまだ販売しているのでしょうか。ご都合のよろしい折に調べていただけないでしょうか」（『呉虞集』、三九六頁）と記されており、一気に久保の著作を五種購入してもらったことが分かる。呉虞がこれらの書籍をリストアップできたのは、この同日に東京博文館から出された『荀子新釈』を王悦之から借用し、その後ろに附されていた刊行書目を読んだからであった。

同月二十二日には、青木が彙文堂に依頼して呉虞に送った『荀子増注』が彼のもとに届き、なお、その七日後の二十九日には、呉虞に書籍代購を依頼された甘廉泉から『唐詩選新釈』も届いている。これは久保天随が注釈を加えたものである<sup>9)</sup>。さて、『荀子増注』が届いた前日に目を向ければ、青木からの書簡で、「久保天随の新釈した諸書は概ね購入できそうだが、日本において彼の学術的水準はそれほど高くないので、もし鄙俗を厭わなかったら、購入しですぐ送ろう」（『日記』上冊、六六五頁）と、やや遠回しに久保を酷評している。呉虞はこの書簡を読んだ当日に返信し、「もし久保天随の学術的水準が高くなければ、買わなくても結構でございます。さらに、諸子に関する新釈の著書につきましては、もし久保天随の著作より優れたものがございましたら、その書名を私にお示しいただければ助かります」（『呉虞集』、三九七頁）と、諦めずに諸子研究の著書を買ひ求め続けている。これと同時期に、呉虞は甘廉泉に葉書を送り、「久保天随の諸子に関する新釈の著書を暫く買わず、青木に調査してもらって書目を送って来てから決めよう」（『唐氏論考』、四九頁）との指示を出していた。

呉虞の要望に応じた青木は、翌一九二二年の一月十六日の書簡で、関連書目十三種を列挙するとともに、久保に対して、「久保天随により著わされた新釈の諸書は本来、啓蒙としての参考書であるが、学術上では価値がない。そもそも彼は著述の専門家なので、その著作は自身の研究成果から得たものではなく、多くは先人の説を剽窃したもので、射利の俗書に過ぎない。とはいえ、実際のところ、近年の日本で彼のものをにおいて他に良い著作もないのである」（『日記』下冊、七頁）と隠さずに酷評している。興味深いことに、東亜同文会が創刊した後日本公使館に引き継がれた『順天時報』で記者を務めた橋川時雄が、「久保天随は

等身大の著述ができて、大正六年に博文館は久保に二〇万円の印税を支払った」（『日記』下冊、一六五頁）との話を残している。

それにもかかわらず、これ以降、呉虞は青木に荻生徂徠の『読荀子』、冢田大峯の『荀子断』、桃井源蔵の『荀子遺乗』の代購を何度も依頼し続けている。その依頼理由は、同月二十四日に、当時北京で留学していた学習院大学の小柳司気太と第八高等学校の藤塚鄰が呉虞の寓所を訪問し、「藤塚先生が『読荀子』『荀子断』『荀子遺乗』のいずれを取っても優れた書であると評していらっしゃいましたので、それらも青木先生に見つかればお送りいただきたい」（『呉虞集』、三九九頁）というものであった。

さらに、一九二四年一月に新設された東北帝国大学の法文学部支那学第二講座の助教授として就任した青木は、同年四月に北京へ在外研究する予定であったが、虎ノ門事件で山本権兵衛内閣が総辞職し、議会も解散したため、この計画は中止せざるを得なくなっていた。同年一月十一日の『日記』に、「久保天随の『韓非子新釈』を買って持ってくるよう、青木に依頼の返信を出した」（『日記』下冊、一五三頁）との記録が見られることから、そのような青木に呉虞は飽きることなく諸子の研究書を終始求め続けていたことが分かる。しかし、これらの代購書籍に関する感想や評論は、『日記』の中にほとんど見当たらなかった。その代わりに、周囲の中国の学者への諷刺や悪評と同程度に、日本の学者への悪口が『日記』の至る所で見られるようになっていた。

例えば、先に触れた小柳と藤塚の来訪について、その前日の一月二十一日の青木宛の書簡では、「両先生はともに孔子の崇拝者と聞いておりますので、明日は目から鱗が落ちる思いで高論を拝聴することになるでしょう」（『呉虞集』、三九九頁）と揶揄している。同月三十一日には、答礼のために呉虞が二人を訪ね、久しく筆談してから辞去したが、当日の『日記』に「小柳は宋学を講究しており、藤塚の頭脳ほど新しくない」（『日記』下冊、一二頁）と記している。さらに、呉虞は橋川時雄に小柳らの情報を尋ね、「小柳司気太は骨董のようであり、清の陳宝琛と同じである」（『唐氏論考』、五三頁）との返答をもらっている。

無論、『日記』には青木への評価も見られる。一九二二年四月一日には、刊行されたばかりの『支那学』三月号を青木から受け取った呉虞が、「青木は私のことに変感服している。日本の漢学を修めている研究者の間で、彼は一応玄人とも称せられている。人柄も率直で悪習に染まっていないところは見習うべきである」（『日記』下冊、二四頁）と、やや肯定的な評価を下している。

### 三、売名の嫌いがある行為：『支那学』への呉虞の投稿

一九二二年三月に刊行された『支那学』（第二巻第七号）には、青木により和訳された呉虞の論考「荀子を通して見た墨子学説の閑却された一面」が見られる。この訳文の最後に、「此の一篇は呉氏が北京大学に於ける最近の講義の一部分で、遙かに其の稿を寄せて示されたから、早速著者の同意を得て茲に訳載することにした」<sup>7)</sup>と、その性質の説明が附してある。

この論考の原題は「墨子の労農主義」で、もともとは北京大学での講義録であった。一九二一年十二月十日の『日記』に、「今日は「墨子の労農主義」を印刷に回した。私は七部を取った。（中略）帰宅後、一部を校正して青木に送った」（『日記』上冊、六六〇頁）と記されている。同月三十日に届いた呉虞への返信で、青木はこの論考に感服し、これを和訳して『支那学』に掲載する予定を伝えている。この書簡を受け取った呉虞は当日、「もし間違った所や手抜きを遠慮なくご添削くだされば幸いですと存じ上げます」（『呉虞集』、三九七頁）と返信している。さらに、翌年二月九日に青木宛の書簡に、「拙稿は今修正を加えているところです。後に別封にて一部を進呈いたしますので、先生のご教示を請い願いたく存じます。題目に至るまで、全て先生のお考えのままに改めてくだされば幸いですと存じ上げます」（『呉虞集』、四〇二頁）と伝えている。この文面から見れば、青木から呉虞へ改題の要望を申し出ていたことが分かる。原題の「労農主義」は呉虞の造語で、儒教の階級制度を撤廃したうえで君臣ともに耕作するという「働かざる者食うべからず」の意味合いであるが、一般の読者には理解しがたいものであった。青木が和訳で改題したことにより原作の趣旨と論証法がより鮮明になったと思われる。

この青木の書簡を受け取った翌日、呉虞は改訂版の原稿を青木に送っている。十一日後の同月二十一日に青木からの返信が呉虞へと届き、「改訂の原稿を拝受し、最近は翻訳を大半終えたので、また改訂の原稿も加えて翻訳を終わらせた後、三月号に掲載する予定」<sup>8)</sup>と青木は伝えている。さらに翌三月二十八日の『日記』には、「青木が胡適を経由して私に転送してくれた『支那学』第二巻第七号が三部届いた。青木が和訳してくれた私の論考が最初に掲載されている」（「唐氏論考」、四六頁）と記しており、呉虞の得意げな様子が窺える。

『支那学』に掲載された呉虞のもう一本の論考が「荀子の政治思想」（第三巻第四・五号）であった。一九二二年十二月八日の『日記』に、「また「荀子政治論」を一部校正し、青木に送った」（「唐氏論考」、四七頁）と書かれており、同月二十日には、「一月か二月に刊行の『支那学』に掲載する予定」（『日記』下冊、七四頁）との青木の返信が届いている。翌年一

月三十一日の『日記』には、「青木からの手紙が届いた、(中略)「荀子の政治論」は今印刷中で、近いうちに届けるはずである。今回は翻訳が要らない。その文章は白話ではなくて、日本人にとって理解しやすいからだとのこと」(『日記』下冊、八六頁)と記されている。

この「荀子政治論」は前述した論考「墨子の労農主義」よりも文語調の幾分難解な文体で綴られていたのだが<sup>9)</sup>、青木が和訳せずにそのまま掲載した原因はそこではなく、二回に分けて連載するほどの長編に対する膨大な翻訳作業を避けたいところと、冗長な原典引用という呉虞の独特の論証法が頻出していたところにあったと筆者は考えている。呉虞は自説の論拠を經子史集の典籍からの引用を枚挙させていたので、その夥しい原典からの引用や自分本位とも見受けられる論点の切り換えは、読者を困惑させるに足るものとなっていた。論考のみならず、呉虞の講義はその点が甚だしかったようで、北京大学国文系で呉虞が講義をした際には、とめどなく紡ぎ出される典拠の洪水に辟易した受講生から、「派生しすぎる」との不満が頻出したほどであるから、訳者としての青木も億劫に感じていたに違いない。

実際、呉虞の論考には『支那学』に投稿したが掲載されなかったものもあった。一九二五年八月、北京大学の教職を辞めて成都に戻った呉虞は、翌年一月五日の『日記』に「毛仲成が人を託して代行書写した原稿を二部送ってきた。その一部を校正して青木に送った」(『日記』下冊、二九三頁)と記している。筆者はこの前後の『日記』を調べたが、この「原稿」に関する情報が得られなかった。この書簡の日付から見れば、青木は文部省の在外研究員として北京に滞在し、北京風俗の図譜作りや『支那童謡集』の和訳で多忙な日々を送っていた頃であるから、それゆえに返信が遅くなったのであろうと推察している。同年三月三日には呉虞に青木からの葉書が届き、「玉稿はすでに拝受し日本に転送しており、次号の『支那学』に掲載する予定だ」(『日記』下冊、三〇一頁)と記されている。しかし一九二六年三月以降の『支那学』を調べてみたところ、呉虞と署名のある論考は見当たらなかった。

本節の小見出しに憚ることもなく敢えて「売名」という表現を用いたのは、百十五万字にも及ぶ『日記』で自身の論考の売れ行きや評判について呆れるほど綿密に記録されているからである。例えば一九二二年十一月二十四日の『日記』には、『独秀文存』はすでに四冊出版され、その通信欄に陳独秀と私の書簡二通ずつ収められている。『胡適文存』や『独秀文存』、梁漱溟の『東西文化及其哲学』のような近頃の著作にも私の名が見られ、これによって世の中に広く伝わられるであろう(『日記』下冊、六七頁)との記録が見られる。また、一九二五年二月二十三日の『日記』では、楊鴻烈の『袁枚評伝』に思想界における儒教の独占的地位を批判する人物を列挙する際に章太炎、呉虞、陳独秀などの名が挙げられているこ

とに対して、呉虞は「原文で私の名前が陳独秀の前に置かれているところに、世論の私への評価を窺い知ることができる」（『日記』下冊、二四五頁）と自負している。

青木宛の書簡で、呉虞が厭きもせずに『支那学』の郵送を催促し続けたのは、これらを踏まえれば自分の論考や『呉虞文録』に対する日本の学界の反応を知りたかったからと見なすことに差し障りはなかろう。例えば、一九二五年七月八日と同月十一日の『日記』に、「李劍華によると、日本の松井等の著した『支那現代思潮』に、私の「礼論」や「説孝」などの文章が和訳され、私は時代思潮を代表する人物として挙げられている。また、『支那新人と黎明運動』という本にも私の文章が和訳されていた。どうやら、私を知っている日本人は極めて多いようだ」（『日記』下冊、二七〇頁）、「劍華の話では、日本人の書店で私の『文録』は販売されており、『支那新人と黎明運動』に私を呉稚暉、李石曾、周作人、魯迅諸氏と同列させているそうだ」（『日記』下冊、二七一頁）というところからも、喜びに浸る心が窺える。

同年八月四日に北京で在外研究していた青木を訪問した呉虞は、『支那新人と黎明運動』の購入を頼んだ。この記録の後に、「彼の購入した書籍を見たら、可笑しいものが多かった」（『唐氏論考』、五七頁）と、自らが依頼した書籍の購入に精力を傾注してくれていた青木を嘲るような文言さえ書いてある。この依頼を受けた青木はすぐさま日本国内の友人に代購を依頼したのだが、これについて呉虞は、一九二六年一月三日の『日記』に「青木からの葉書が届いた。十二月十一日に出されたものだ。八月に『支那新人と黎明運動』を購入して従弟の君毅の処に送ったということだ」（『日記』下冊、二九三頁）と記している。

しかし、筆者がこの清水安三の著書『支那新人と黎明運動』を読んだ限りでは、呉虞の名前は一か所も出てこなかった。儒教批判を論じる主な部分は「反孔教と道德革命」「孔教擁護と其反駁」「反孔運動の功過」という三節に集中しており、その中では陳独秀の論文「憲法と孔教」や「孔丘の道と現代生活」、さらに儒教擁護の代表として『順天時報』に載っている匿名の「孔教研究」を取り上げた論述であったが、呉虞の言論に触れたところは存在していなかった。皮肉なことに、この書を非常に気に入っていた呉虞は、一九二七年の日記で「黎明老人」と頻繁に自称していたのである。その一方で、東洋研究会同人である松井等の『支那現代思潮』は、一九二四年十二月に東洋講座第一輯として出された小冊子の中にある「新家庭生活の要求」という一節で、呉虞を家族制度への攻撃者として紹介し、「呉虞の著はした『呉虞文録』には儒教の教ふる孝道礼教の缺陷を論じ又儒教が階級制度を主張する害を説き併せて家族制度は専制主義の根拠であるといふ事を罵つて居る。（中略）論法を忌憚

なく而かも一々典拠を示して推し進めたのであるからその論理の正不正如何に係らず急進改造派の人々には歓迎されたわけである」<sup>10</sup>と、可否の意見を示さずにその論考の要旨をまとめているのみであった。

『日記』での内面の嘲笑にとどまらず、呉虞は行動や態度でも青木へのそんざいな扱いを示している。彼は青木から贈られた処女作『金冬心之芸術』には興味を持たず、一九二三年三月二十八日にこれを北京大学の国学研究門に寄付した。その一方で、呉虞と同じく絵画を専門としない胡適は、この処女作にある句読点のミスを丁寧に指摘し、「先生の「巨眼」がなんと金冬心一派の芸術を発見し賞賛なさるとは思いもよらなかったことです。ご論考「古拙論」及びお描きになった『品梅記』の表紙からして、先生はこの一芸の心得があると確かに分かります」と肯定的に評価している。このように両者の反応には雲泥の差がある。因みに、青木たちの同人は『支那学』を越境の雑誌にするために、一九二〇年十二月十七日に胡適宛の書簡で、「先生のご病気はやや快復してから、玉稿を恵投するよう冀う次第です。片言隻句でもかまいませんので、何卒私どもの期待に背くことのないよう願います」<sup>11</sup>と、寄稿を依頼しているが、結局、胡適は多忙のために投稿しなかった。これも積極的に『支那学』に投稿していた呉虞とは対照を成している。これらの些細な言動から、呉虞は心底から青木を学問の切磋琢磨できる学者と見なしてはおらず、ただ書籍購入や自己宣伝の道具のように扱っていたことが分かる。

## おわりに

本稿は青木と呉虞との往復書簡への解説を通して、両氏の交わした学問的探究や議論などを明らかにしたものである。両氏の往復書簡をまとめてみると、初期においては儒教批判という共通の思想基盤によって互いに本心を吐露し、ことのほか熱意を示し合っていたものの、俗文学や芸術に興味を持っている「文芸の徒」なる青木と、伝統的倫理観から脱却できぬままに名誉を汲々として追い求める呉虞とは、研究分野や関心事が大いに異なっていた。それゆえ、時間の経つにつれて、当初の熱意が次第に冷め、平淡なやりとりになり、書籍購入のような事務的なことに傾いていった後は、自然消滅に終わってしまったのであった。

その一方で、青木と胡適との書簡往来には学術にかける切磋琢磨が随所に見られた。呉虞が青木の『金冬心之芸術』を北京大学に寄贈したことと対照をなしているのは、胡適がこの著作にあった青木の句読点の間違いを熱心に指摘しているところである。さらに胡適は青木の協力により『水滸伝』の版本考証や『章実齋先生年譜』の考証などを成し遂げているが、

青木のほうも同様に胡適からの教示を受け、論文「水滸伝が日本文学史に布いてゐる影」（一九二一年四月）と「岡島冠山と支那白話文学」（一九二一年五月）を執筆している。二人は心底から互いに敬意を払いながら真なる學術の探求に本腰を入れていた。

また、日本で自分の知名度を高めるために苦心していた呉虞は、『支那学』に投稿したり、販売目的で青木に同郷の費密の『費氏遺書三種』や同門の廖平の著作を送ったりしていたのだが、これらの影響として小島祐馬による學術論考があることも触れておかねばならないだろう。

さらに、京都支那学の実証的研究法を表明するために、青木は「東京の学者には、その研究態度に不純なところがたくさんあります。彼らが孔子をなお崇敬の偶像としているのは極めて可笑しいことです」（『日記』下冊、一三頁）と、東京の学者を槍玉に上げていた。これは東大の白鳥庫吉が文献学に基づきながら堯舜存在を否定していた態度と比較して考えると、青木の発言はやはりラジカルな傾向があったと思われる。

#### 注：

- 1) 胡適「呉虞文録序」（『呉虞文録』所収、上海亜東図書館、一九二一年）七頁。
- 2) 呉虞に関する先行研究は主に、唐振常「呉虞研究」（季刊『歴史学』第四期、一九七九年）、唐振常「呉虞与青木正兒」（『中華文史論叢』第三輯、一九八一年）、鄧星盈ほか『呉虞思想研究』（四川教育出版社、一九九六年）、後藤延子「呉虞の儒教批判——その目指すもの——」（日本中国学会創立五十年記念論文集編集小委員会『日本中国学会創立五十年記念論文集』、汲古書院、一九九八年）、冉雲飛『呉虞和他生活的民国時代』（山東人民出版社、二〇〇九年）などが挙げられる。
- 3) 「亡是公」は司馬相如の『子虚賦』に登場する架空の人物である。楚の国が子虚という者を斉の国に使者として遣わした際、斉王はあらゆる車馬を出してその使者を連れて狩りに出掛けた。狩りが終わると、子虚は烏有先生の家立ち寄り、自慢話をした。亡是公もそこにいたので子虚・烏有先生・亡是公の三人が、それぞれ楚王・斉王・天子の狩猟の盛大さを自慢し合ったという故事がある。子虚も烏有先生も架空の人物である。
- 4) この一つ目の論文が一九二六年十一月に脱稿した「堯舜伝説の構成」（『支那学』第四巻第二号に掲載）である。二つ目については特に集中的に論じている論文は見られなかったが、『支那文学概説』（一九三五年）の第二章「文学序説」の中の「儒家の文学観」や、「支那文

芸と倫理思想」(岩波講座、一九四〇年)の第二節「漢以来の文学思想に於ける儒家の道義的詩説の影響」や、『支那文学思想史』(一九四三年)の第二章「周漢の文学思想」の中の「漢儒の道義的文学思想」などが散見できる。

5) この呉虞が引用している韓非子の論述は原典と若干の齟齬が見られる。『韓非子』頭学篇には「孔子墨子俱道堯舜、而取舍不同、皆自謂真堯舜。堯舜不復生、將誰使定儒墨之誠乎」(孔子墨子、俱に堯舜を道ふ。而して取舍同じからず。皆、自ら真の堯舜と謂ふ。堯舜復た生きず。將に誰をか儒墨の誠を定めむや)とあるが、呉虞は原文の「堯舜不復生」を「孔墨不可復生」と間違つて引用していた。

6) 『日記』を調べたかぎり、呉虞はよく甘廉泉を依頼して書籍を購入してもらった。例えば、一九二一年十月二十四日に「甘廉泉は日本から『支那学』第一卷の十一冊を送ってきたが、なお第十二号が一冊欠けている。甘廉泉に葉書を送り、書籍領収のことを伝えている。葉書を出すやいなや、また高瀬武次郎の『老莊哲学』一冊と、『楊墨哲学』一冊、『支那学』第十二号一冊が届いた」、同年十二月二十九日の日記に、「甘廉泉は『唐詩選新釈』第一・二冊を送ってきた。これは李攀龍により選出、久保天随により注釈されたもので、頗る詳細で完備されている。第三・四・五冊が欠けているのが口惜しい。甘廉泉に葉書を送り、欠けている分冊を見つけてほしいと依頼した」、一九二二年十一月三日に、「甘廉泉に手紙を送り、雑誌『東洋哲学』、『墨子解詁』、『莊子新釈』の購入を依頼した」、同年十二月十九日に、「甘廉泉から『漢籍国字解韓非子』を一部二冊送ってきた」などの記録が見られる。この甘廉泉はあまり知らない人物であったが、一九二一年七月三十日の『日記』において「呉自偉は今日本明治大学の三回生で、四川省榮県出身の甘象堃(名は廉泉)と一緒に日本の東京神田北神保町十番地の中国青年会に住んでいる」と簡単に紹介されている。

7) 青木正児「荀子を通して見た墨子学説の閑却された一面」(『支那学』第二卷第七号、一九二二年三月)四八四頁。

8) 正式に出版された『呉虞日記』に一九二二年二月二十一日のこの記録が見当たらないが、唐振常の論文「呉虞与青木正児」(『唐振常文集』第三集に収録、上海社会科学院出版社、二〇一三年)によって確認できる。以下は「唐氏論考」と略し、文中でページ数のみを注記する。

9) 例えば、一九二一年十二月六日に記されている「帰宅後、完成した「墨子の勞農主義」を白話文に改めた」という記録から、呉虞のような旧派文人は新興してきた白話文を自由に駆使できず、論文を執筆する際にはやり文語の文体を使っている。それゆえ、白話文に改めら

れた「墨子の勞農主義」の中に文語表現が少なからず混じっている。興味深いことに、一九二二年一月二十二日の日記に、呉虞の初めて白話詩「懷小女柚子詩」二首が記録されている。

10) 松井等『支那現代思潮』（東洋協会出版部、一九二四年）五一～五三頁。

11) 青木・胡適書簡研究班「青木正児・胡適秘蔵往復書簡集」（『名古屋大学中国語学文学論集』、第二〇号、二〇〇八年）三一頁。